

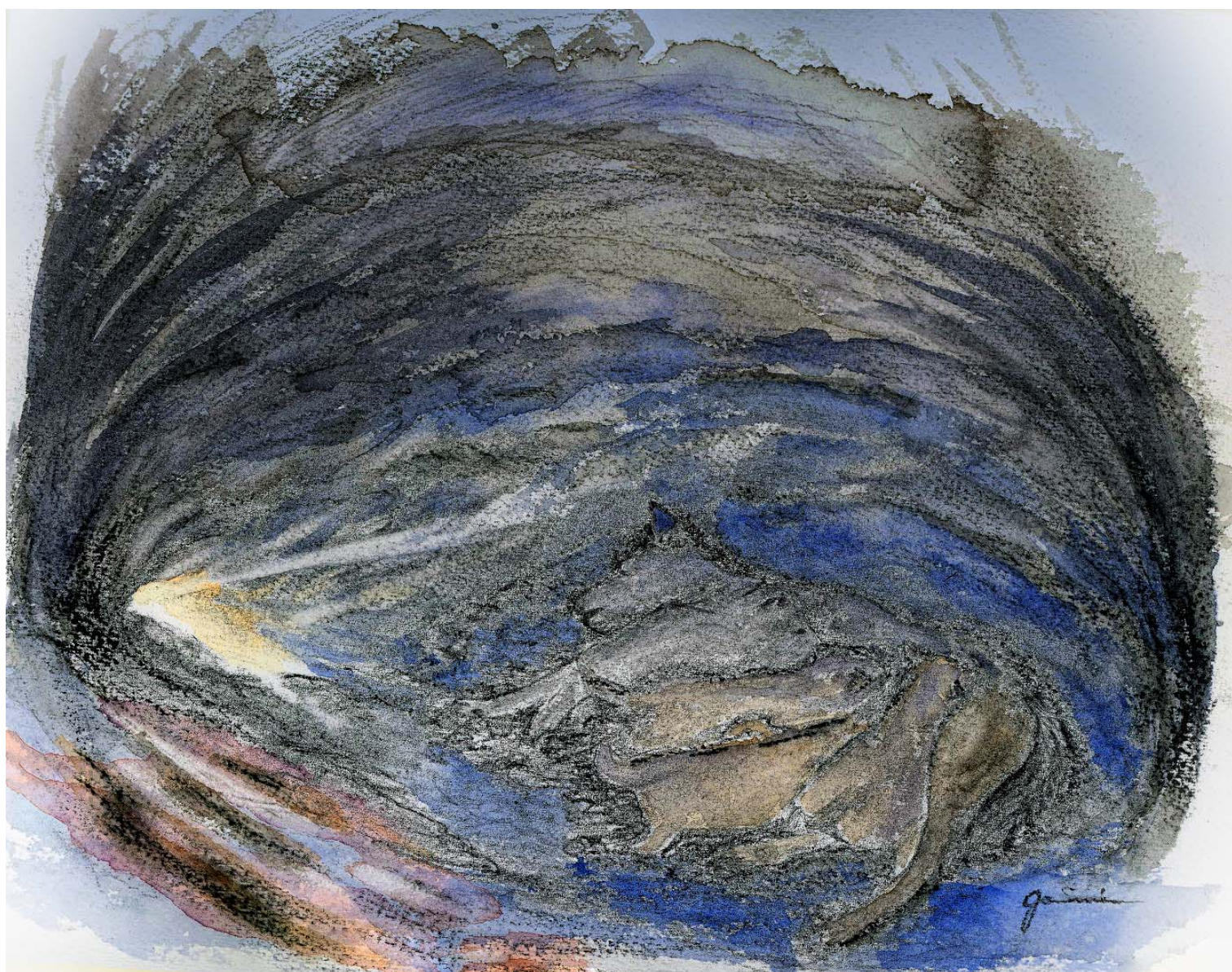
NPO 法人



2016年3月10日

第29号

# Jomon Shiba



特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

イヌにとっての快適な環境とは ☆岩手県 佐々木俊幸	2
中村一恵先生へ — 感謝を込めて ☆JSRC 副理事長 五味靖嘉	5
シバの散歩道 (29) ☆JSRC 理事 根深 誠	7
おたよりコーナー ☆秋田県 藤原庸子	11
☆ガジュマルの近況報告 鳥取県 畠中秀平	12
☆秋田県 齊藤なみ子	13
☆犬を飼う者の気遣い 石川県 黒梅 明	15
☆初めてのお留守番? 和歌山県 土山仁美	16
☆鳥取県 仲井 莖	17
☆「良子」の近況 NO.20 富山県 竹内誠一	18
☆少し遊んだ子犬 秋田県 五味靖嘉	18
<b>事務所報告</b>	
☆新入会 ☆会費 ☆仔犬登録 ☆寄贈	19
<b>総会・理事会のご案内</b>	19
☆総会出欠ハガキのご案内	20
☆総会会場案内図	20

## 総会・理事会のご案内 JSRC 理事長代行 橘 宏

会員の方には、4月23日(土)総会・理事会の出欠ハガキを同封しましたので、3月25日までに必ず投函してください。会場は鎌倉温泉です。

宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字鎌倉沢 102 (略図は20頁参照)

- ◆30号発行予定:2015年6月10日頃。原稿の締め切りは2016年4月20日です。  
・会費や寄付などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

**お願い:**今号より、会誌の編集担当が変わりました。今後、会誌に関する問い合わせや寄稿等につきましては、新たに担当になりました黒梅までお願いします。

黒梅連絡先 メール: [popolo117@fork.ocn.ne.jp](mailto:popolo117@fork.ocn.ne.jp) ☎: 090-4689-8262

会事務所: 〒014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前 119 番地 5 ☎0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/> [encounter\\_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp](mailto:encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp)

郵便振替口座: 02280-2-106951

# イヌにとっての快適な環境とは

岩手県 佐々木俊幸

たま(栗駒の紅中)

2014 年 6 月 30 日生(栗駒の紅中×鉄火の紅子)、雄



先輩犬すず(左)と縄文柴犬のたま(右)

## 1. はじめに

我が家での犬飼は、「外飼い」を基本としている。子供の頃からどうも家の中で犬を飼うというのには違和感があり、「犬は家族」とはいえ、外の犬小屋にと考えている。

柴犬を飼いたいと思う背景には、このような視点があるのだろう。毎朝、窓を開けると元気に迎えてくれるワンたち、そんなライフスタイルが理想である。

厳寒の冬場でも犬小屋を暖かくして外で越冬できるようにと思い、毎年 11 月には犬小屋の冬支度をしている。電気カーペットなどの暖房機器を犬小屋に設置するのが理想的ではあるが、電気ケーブルを噛んだりすることや、自宅と犬舎の距離が若干あるので、電源確保には今ひとつ難があるというので、犬小屋の中に毛布を入れたり、何らかの断熱効果を工夫したりという程度の対応である。



※我が家の居間の向かいにある犬舎。2 頭分長屋形式になっています(´▽´)



寒さに凍えて家の中で暖をとってほしいと設置した断熱材はワンのかっこうの遊び道具となって粉々にされてしまった。

## 2. 縄文柴犬欄との失敗談

2005 年度から、我が家では柴犬の 2 頭飼い(日保犬籍・縄文柴犬籍)をしているが、縄文柴犬の方が、この冬場対応でだいぶ手こずってきた経緯がある。

日保犬籍の方はこちらの冬場の仕掛けに対して、その意図を理解?してかどうかはわからないが、問題なく対応してくれるのだが、縄文柴犬(中の蘭姫・H24.1 没)は、ことごとくダメ出し。

2 頭飼いになる前から我が家にいた先輩犬(日保犬)の場合、冬場は湯たんぽにバスタオルをくるんで小屋の中に入れてやると、「これは快適」とばかり、冬の夜は静かに家の中に横たわっていたのだが、後輩犬の縄文柴犬は、同じようにしてやると「何じゃこりゃ!」とばかりに夜中を通してバスタオルを引きはがし、湯たんぽを噛んで穴を開け、朝になったらバスタオルのかけらと穴の開いたぼろぼろの湯たんぽが小屋から引き出されている惨状。

それではと、湯たんぽなしで毛布を代わりとに犬小屋に敷いてやってもダメ。直接体に接しないようにと断熱材を犬小屋の周りに巻いてやっても、イイ迷惑とばかりに引きはがすといった始末。

あげくは「じゃあ、余計なことはしないでほっとくか」と怖々放っておいたところ、一冬をそれで過ごすというたくましさであった。

しかしながら、8 歳を迎える冬の寒いある晩に、突然死なせてしまうと言う大失態を迎えてしまった。「たくましさがあるから

大丈夫」ではなく、見かけ上元気に見えるように見えてイヌの老年期にさしかかっている時期を察して対応しなかった飼い主側の責任だと思っている。

考えさせられたのは、「イヌが思う快適さ」と「ヒトが思う快適さ」のズレである。そのところが、私自身よく理解できていなかったという反省があり、テレビでよく見かける「愛犬家」を称して、周りに呆れられる対応をしている勘違い輩と自分は何の変わりがないのだと自己嫌悪に陥った次第である。

### 3. リベンジの冬場到来

去年の夏に、亡くなった縄文柴犬の後継犬を家に迎えた。血統書を見ると懐かしい名前が書かれている、亡くなった犬のちょうどひ孫にあたる犬である。

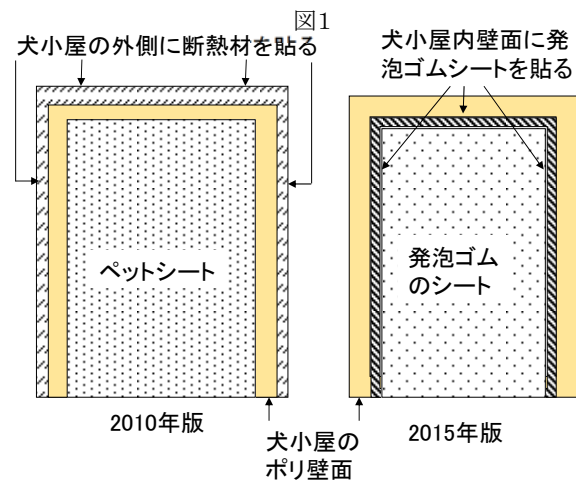
去年の冬はまだ子犬であることから家の中においたが、春からはひいおばあさんのいた犬舎において、ひとシーズンを過ごし、この度外での冬を迎える。

犬舎の中にポリエチレン製の犬小屋をおいてはいるが、犬小屋には何らかの防寒対

策をする必要性があるため、次のような準備をした。

- ・剥ぎ取られなくするには、小屋の内側に、密着するような形で断熱材を入れる。
- ・ひいばあさんの時の経験からすると、断熱シートを小屋の壁にガムテープで貼り付けるのではなくて、剥ぎ取られない形式に取り付ける必要がある。

今度は前回のような失敗はするまいと思いつながら、図1のような設置を想定して防寒の設置を試みた。



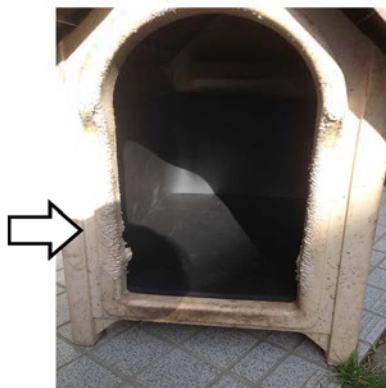
資材は10mmラバーシートと両面テープ。3,000円程度で準備できる。



両面テープをつかい、シート部分を固定する。



接着部分が露出していない分、引っかけて外すことはできないはず…。



同じ方法で、内壁面も固定。これで小屋内部の暖熱は完璧！

- ・断熱材は、柔らかくほぐしやすい素材ではなくて、発泡ゴムの薄いものが望ましい
- ・断熱材は 10mm 厚の発泡ラバーシートを使用。幾分柔らかい感触を持たせたほうが良いと考えた。
- ・断熱材の固定については、以前はガムテ

ープで行っていたが、犬にとってはこのテーピング跡が気になるポイントらしくて、これを剥がそうとすることから始めた様子が見られていたので、接着部については目立たぬよう、両面テープでびったり固定するように切り取って接着した。

- ・犬小屋全体を断熱材で穴蔵式に囲い込むことで、居住している際の断熱効果がさらに高まるよう、また、いわゆる縫い目が目につかないように、ラバーシートを小屋全体を囲い込むように採寸し、両面テープで固定。爪でシート壁面を引っ掻いたとしても簡単にはとれない構造にした。
- ・ここまでして、ちょっと気になるのはゴム臭。場合によっては小屋の入り口で警戒して、中に入ろうとしないかも…

#### 4. 改装工事後のワンたち

冬支度を終えて、縄文柴犬と先輩犬を犬舎に引き入れた。

両者とも犬小屋の入り口から眺めて「何だ、こりゃ？」といわんばかりにまずは足下のゴムシートをゴシゴシこすりつける様子。中に入って今までにない感触であることを確かめて、怪訝そうな顔で2匹ともこちらを眺めだした。

先輩犬の方は、どうやら事情を察した？らしく、まあこんなものかね…とでも言いたげな雰囲気その後小屋の中に収まったが、縄文柴犬側はいつまでもシートをこすりつけたり、壁をガリガリやっている様子。

まあ、なんとかなるだろうと、その日を終えた。

#### 5. 呆れた…朝の惨事

次の日の朝、いつものように犬舎を眺めたら、ご覧の通り。縄文柴犬舎のほうは、一晚かかってやっと剥がしたのだろうか。ゴム断熱材が見事に剥がされて散乱状態であった。

しかしながら、先輩犬の方は全く手つかず、こちらの思惑通りに対応していたので、仕掛けた側もちょっと救われた気持ちでは

あるが…。

縄文柴犬の反応は、「まだまだやんちゃが抜けない」という言い方もできるが、以前に飼っていた縄文柴犬と同じような結果を見舞わされたわけで、世代をまたいでの同様な反応に驚きを感じている。



一つには、環境の変化に敏感なこと。単なる遊び道具としてこういった防寒グッズに目をつけただけではなく、たぶん匂いや感触など、微妙な変化に対して敏感に反応する性質があることが考えられる。

犬本来の個性や、しつけ歴の違いなどもあるだろうが、血統の違う日保犬との反応の違いは、縄文柴犬の生来的な性質と考えることもできるのではなかろうか。

今のところ、冬場をしのぐ縄文柴犬対策？としては、以下のようなところを考えている。

- ・犬本体の冬場をしのぐ体力の養成…縄文柴犬は一般に皮下脂肪が少なくやせ型であるように思う。一つの対策として冬場は皮下脂肪を若干つけさせる、つまりは冬場の栄養状態を良くするべきと考える。肥満とならないように注意しながら心がけたい。
- ・転ばぬ先対応ではなく、適時適策で…今回の防寒対策は、縄文柴犬に拒否をされたというよりは、必要のない過保護な対応だったということもいえよう。こちら岩手では1月を過ぎると、降雪

量よりも厳しい寒さを迎えることが特徴である。犬たちの様子をよく観察しながら、犬たちにとって必要な対応を考えてみたい。

縄文柴犬との快適な冬の過ごし方を検討するプロジェクトは、まだまだ終わりを告げられない状況である(^\_^)。

## 中村一恵先生へ ー 感謝を込めて

JSRC 副理事長 五味靖嘉

中村一恵先生は、去る 2015. 11. 30, 悪性リンパ腫によって急逝されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。合掌



神奈川県立生命の星地球博物館学芸部長(2002 年当時)

私との出会いは、1998 年「ニホンオオカミの分類に関する生物地理学的視点」という論文をきっかけに文通がはじまりました。この論文は、神奈川県立生命の星地球博物館の許可をさせていただき、会誌に転載させていただきました。そして、1999 年 5 月に JSRC の前身である柴犬研究会に入会していただき、2005 年には顧問を引き受けていただいた事がありました。それから以後、2015 年春まで文通と資料などのやりとりが膨大な量で蓄積されました。圧巻は、「ハウリング」という特別コーナーに論文連載する企画です。その都度、意見を求められ、文通のやりとりや資料の交換などがあり、ここでは書ききれないほど膨大な勉強をさせていただきました。

2002 年「オオカミ類の進化史を追う」は、会誌用を書いて下さいましたが、その後の 10 年余の先生の論文に引き継がれております。JSRC への寄稿に限って触れますと〈私のオオカミ進化論〉がそれです。ここに決まるまでには様々な内容があり 3 年ほど経過し、沢山のテーマが出てきました。その一部の図案・写真を見せてくださり意見を求められたのが、まだ昨日のように新しい記憶です。取り敢えず、論文の項目を整理すると次のようになるかと思えます。

- 2004. 9 第 1 回 ニホンオオカミ (ヤマイヌ) の学名とその由来
- 2004. 11 第 2 回 犬落とし
- 2005. 2 第 3 回 狼毒殺
- 2005. 4 第 4 回 ミステリアス” ウルフ”
- 2005. 7 第 5 回 犬落とし (2) ークレプトパラシティズム
- 2005. 9 第 6 回 狼の黒焼き
- 2005. 12 第 7 回 エチオピアオオカミー分子情報が明らかにしたアフリカの〈オオカミ〉
- 2006. 2 第 8 回 送り犬ー導犬説
- 2006. 5 第 9 回 「鷲家口オオカミ」はなぜ重要か
- 2006. 8 第 10 回 オオカミは大きくもなり、小さくもなる
- 2006. 10 第 11 回 アカオオカミ、リストから消える
- 2014. 12 私のオオカミ進化論-1
- 2015. 3 私のオオカミ進化論-2(絶筆)

## Howling - ハウリング -



ハウリングの表紙-中村一恵画

## 思い出の 1

JSRC の前身「柴犬研究会」当時、先生は「顧問」を引き受けて下さり、初心者にも判りやすい犬と狼の入門書として〈ハウリング〉を企画して下さいました。その時の送られてきたカヴァー用のデッサンを見て、私は驚いたのです。少々長いのですが引用すると「犬落としを最初に発見するのはカラスの群れで、明け方の空に、異様なカラスの鳴き声を聞くと、家犬たちもそれに気づいて、さっそく犬落としのある現場にかけつける。そして、鹿肉にむらがるカラスの群れを追い払って、今度は犬たちが第二の賓客になって、ごちそうにあずかるが、しかしこの時の犬たちの喧嘩ぶりから、飼い主たちもそれと気づいて、現場に駆けつけて犬どもを追い払い、漁夫の利を占めたものである。」この部分は松山義雄〈狩りの語り部〉の一部ですが、見事に犬落としの世界を描いてありました。二ホンオオカミがシカを倒した夜明けの構図、それがハウリングの表紙絵です。後で知ったのですが、先生は、幼き頃より絵画の天才だと知りました。写真撮影も優しく深みのある見事な腕前ですが、本題とそれるので省略します。



上野村・生犬穴の前の中村先生 (2003. 9)

## 思い出の 2

2003 年に群馬県・上野村「生犬穴」を見に行くというので同行させていただきました。村外れにある山腹の宿で落ち合うとき、せっかくだからお互いの標本を持参しないか？と先生からの提案があり、私は 15 体ほどの、縄文柴犬の頭骨を持参しました。先生は、世界最大級といわれるオオカミの下顎骨をリュックに入れて見せてくれました。そのとき、私の縄文柴犬の雄の頭骨を 1 年間貸してくれないか？と申し出があり、その場で了解しました。後に、その標本はハウリングの第 10 回に掲載されています。

宿に着いたのが午後 3 時ころなので、話し合う時間はたっぷりありました。その雑談の中で面白かったのが、イヌとオオカミ学で、話は延々と深夜まで尽きることなく続けました。翌朝は、私のパジェロミニで、上野村の教育委員会に立ち寄り、見学の是非と場所の確認をしてから、ハイキング気分で行きました。その昔、二ホンオオカミが生息したであろう、急峻な石灰岩体の山道が、神秘的な雰囲気醸し出しており、日陰でコーヒーを入れて昨晚の続きに楽しい時間をいただきました。

オオカミとイヌフォーラムに参加し、夕食時の  
中村先生(群馬) 2004. 11

## 思い出の 3

最後に、どうしても言いたいのは、「私のオオカミ進化論」は 2 で絶筆となって終わってしまいましたが、予定では 4 回の連載

でした。最終回の計画には、オオカミの「四季?(仮称)」挿絵 7 枚を予定され、その図を私は依頼されておりまして。時間を惜しんで構図を考え、5 までは概略がまとまったその頃に、先生は体調を崩されつつ「原稿の 3 は送れない、迷惑をかけてすまない」との電話と、その後にお手紙を頂いたのが

最後でした。しばらくして、奥様からは「動物大好き少年のままの 75 年の生涯をおくることができたかと存じます」とお知らせを頂きました。

中村先生と私には、まだまだイヌとオオカミの話が終わっていないのです。

(2015. 12. 23)

## シバの散歩道 (29)

根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)

秋、わが家の庭木の小枝にカマキリの巣(卵鞘)を見つけた。それ以前、夏に草むらで一匹の成虫を見つけたのだが、そのときはまさか巣をつくるなどとは思ってもみなかっただけに驚いた。ささやかな発見! と言っていいかもしれない。

カマキリの巣の位置の高低で、その年の積雪量を占う俗説がある。巣の位置が低ければ積雪が少なく、高ければ積雪が多い、と言われている。科学的根拠はないということだが、ないからと言って目安にならないということにはならないと思う。現実には科学的なはずの気象情報ですらはずれることがある。

カマキリの他に俗説では、カメムシの発生量も積雪量の目安にされている。カメムシが多い年は雪が多い。他にも草花の狂い咲きが多く見られる年は雪が多い、ツバキの冬芽を包んでいる葉(鱗片)が厚い年は雪が多い、というのもある。

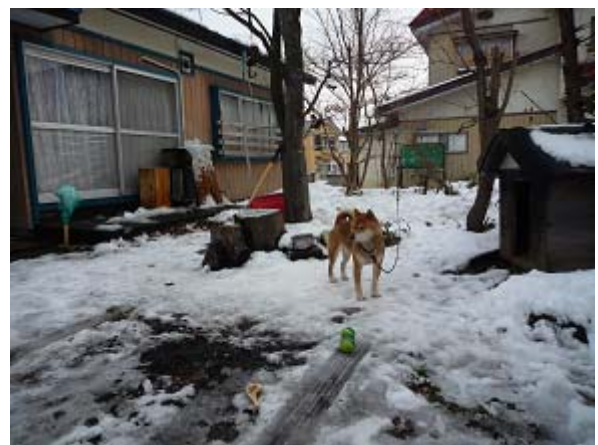
わが家の庭で見つけたカマキリの巣は、位置の高さを測ってみたら地面から約 40 ㎝。これは低いと判断し、もしかしたら今冬は少雪かもしれないとの予感がした。それに加えて、今冬はスーパーエルニーニョ現象の影響で雪が少ない、という科学的な根拠もある。

となれば、今冬は雪が少ないと踏んで間違いないだろう。つまり、雪が少ないのだから、カマキリの巣が低い位置にあっても雪に埋まることはない。しかし、科学的根

拠によれば、雪に埋まっても何の問題もなく孵化するそうである。だからといって、予知能力のあるカマキリがあえて、雪の埋まる場所に産卵する必要もまたない。

ところが、ここで困ったことがある。わが家の庭で見つけた、カマキリの巣のある場所が物置小屋の軒下になっていて落雪が溜まる。その落雪の衝撃で巣が壊されかねない。カマキリは、そこまでは予知できなかったのではあるまいか。

私はカマキリの巣を保護してやろうと思い、バラ板で雪囲いをこしらえた。他の庭木には雪囲いなど施したことなどなかったのに、これはいったい、どうしたことなのか。べつに、カマキリが好きなわけでもない。あの奇妙なツラ構えといい、斧といい、獐猛な肉食性といい、嫌いなくらいだ。



今年正月早々、雪の少ないわが家の庭

と、ここでカマキリを好きになれない強力な理由を思い出した。体内に宿るハリガネムシだ。思い浮かべただけでも気色が悪



い。もしかしたら、わが家の庭に産みつけられた卵が越冬して春に孵化し、カマキリの数が増えたぶん、ハリガネムシも増えるのではないだろうか。シバの飲み水に出現したりしたらたいへんだ。シバの体内に宿ることにもなりかねない。

わが家の 50 坪ほどの庭にはコオロギやバッタもいるのでカマキリの餌になりかねない。それらの昆虫の体内にもハリガネムシが宿り、シバがそれを食べたりしたら、と想像しただけでも気が滅入る。

シバは小屋に侵入したゴキブリを食べてはいないようだが、かみ殺していることがある。シバの小屋を掃除すると、たまにゴキブリの死骸が出てくる。

そうしたことを考えると、カマキリの巣を保護するのは如何なものか。いっそのこと、小枝もろとも巣を切り取って、シバの散歩コースのどこか適当な場所に移したらどうか。

逡巡した結果、移すことにした。近所に数畝はあろうかと思われる、リンゴ畑を伐採した跡地の原っぱがある。そこだと散歩がてらに観察するにしても都合がいい。サワラの生垣があるので、いずれ、その枝にガムテープで繋ぎとめるとしよう。

※ ※ ※

冬に雪が少ないと、雪国に住む人なら誰しも、肩の荷が下りたようにほっとする。雪が嫌いでない私でさえ、拾いものでもしたような得な気持ちになる。雪を嫌いでないからといって、逆に好きだというわけでもない。木々の落葉を邪険にしないのと同様に自然の断片と捉えて受容しているのだ。

わが家では大晦日から正月二日までの三日間、家人が愚息ともども実家に帰るので、私はシバといっしょにリラックして過ごすことができる。その間、私は毎日、朝の散歩を終えて食事を済ませたのち、バスで一時間あまり近郊の山のいで湯に出かけ、午後三時ごろ帰宅し、夕方の散歩を終えて晩酌に親しむ。

以前は、夜になると玄関の土間に座布団を敷いて、そこにシバを寝かせていた。シバは安心してぐっすり眠り、朝に、こら、起きろ、と声をかけられるまで寝入っていることもあった。夜中に尿意を催すと、玄関の戸を前足でガリガリ音を立てて引っかくのでわかるのだが、たまに寝小便をすることがあった。座布団がびっしょり濡れている。

私は何ら問題にしなかった。座布団を干すなり取り替えるなり洗濯するなりすれば済むことだと思うのである。

ところが家人と愚息は臭いだの汚いだのと、シバを追い出す口実にした。結局、私が押し切られた。

それゆえ、暮れから正月にかけての三日間は、家人と愚息がいないのでしめしめということになるのだが、文句たらたら、それすら禁じられるようになった。実家から戻ってくるなり、まるで警察犬が臭いを嗅ぎ回るように鼻をひくひくさせ、臭気を嗅ぎ取るのだ。

私としてはシバに申し訳が立たなく慙愧の念に駆られる。



家の中で居間に身を乗り入れるシバ  
正月に、山のいで湯で独りくつろいでい

ると、地元の爺さんたちや湯治客の会話が耳に入ってくる。誰もが雪の少ないことを口々に喜んでいて。私は恥ずかしげもなく、ここで手遊びの短歌を一首詠む。

年明けて福笑いする湯治客今年は雪の少ない年ぞと

ところが年明けの三箇日が過ぎて本格的に雪が降った。例年ほどではないにしても深夜、除雪車が轟音立てて出動する。そのたびにシバが小屋から飛び出し、吠え立てる。

以前、玄関の土間に入れていたときは吠えることはなかったのだが、さかんに吠えて私に知らせているのだ。私は寒い中、下着姿で出て行き、よしよし、小屋に入れ入れ、となだめる。シバは不満そうに唸り声を洩らしながら小屋に入る。ところが私が小屋に入ると、また出てきて、除雪車の轟音が消え去るまで吠え立てる。

除雪車の轟音とシバの吠え声が治まるとこんどは入れ替わりに、近隣の家からスコップを持った人が出てきて、除雪車が道路わきに寄せていった雪の片づけ作業にとりかかる。その音がまた耳障りなのである。

深夜に降り積もる雪には、原初の静寂を感じさせる深遠な哲理にも似た魅力があるはずなのだが、世間の現実は何れどころではないようだ。

それにしても、除雪車が車の走行のほとんどない深夜の時間帯に作業に当たるのは道理に適っていると思う。だが、その直後にスコップで雪片づけするのは、それが寝静まった深夜であることを考えれば、近所迷惑であり慎むべきではないのか。と私なら思うのだが、世間は何のその、向いも隣もその隣も競い合っているように感じられてならない。「みんなで渡れば怖くない」式の集団思考の原理が働いているのだろうか。

想像するに、男女の分け隔てなく当人もまた、それまでは布団の温もりに蹲って就寝していたはずである。それをわざわざ身



去年、わが家の前の道路を轟音を立てて進む除雪車



雪の多かった去年冬のわが家の庭



去年は家の中から玄関の戸を開けると、まるでカマクラから外を覗いているようだった

支度を整えて外に出て雪かきをするのは、もしかしたら雪に対する尋常ならざる強迫観念が深層心理にこびりついているのではあるまいか。

私にはそうとしか思えない。毎冬、繰り返す、嫌というほど、神経を逆なでされる

ようなスコップの金属音を聞かされるのだから堪らない。

今冬も、積雪が少なく路面のむき出しになった道路に、自分の敷地内の雪を運んでばら撒いたり、自分の家の前の道路の片隅に残った雪を打ち砕いたり、日が射せば消える程度の新雪を、日が射す前の早朝に、スコップを擦りつけ路面を磨き上げるようにして除排雪するなどの作業光景が見られる。

私の知人が話していた。

あれはね、やることのない年金受給者の暇つぶしですよ。運動のつもりで精魂込めてやっているのですよ。それが証拠に、うちのオヤジがそうなんです、早朝暗いうちからガリガリ騒音立てて、ああ、いい汗かいた、と言って家に入って来て朝風呂に浸かってから食事をとるんだ。騒音が近所迷惑になるから手加減しろ、と注意しても聞かない。雪が降ると俄然ファイトが湧くらしい。

※ ※ ※

シバとの散歩を通じて得た十一年間の数々の見聞で、いちばん由々しき問題を孕んでいるが、弘前市役所の「犬猫看板」であることは、この連載で一貫して指摘してきた通りである。

この点について、市役所の公園緑地課が管轄しているので機会があれば課長と面談し、腹心を探りたいと思っていた。とって単刀直入に面談を申し込むと、相手を警戒させてしまうことが懸念されるので遠慮していたのだが、前年の暮れに別件で面談する機会を得た。

別件というのは、今年から八月十一日が国民の祝日「山の日」であることから、その制定を記念し、弘前市にある岩木山の「弥生いこいの広場」に登山口を開設したらどうか、というものである。「弥生いこいの広場」はかつて失敗したリゾート開発の跡地であり、立派な道路と建物が残っている。放置されている旧登山コースが、そこから少し離れた尾根筋を通っている、それ

とつなげるための登山口を「弥生いこいの広場」に開設すれば有効活用にもなる、という内容の趣意書を作成し、有力者の知人に仲介をとってもらい、公園緑地課の課長と面談したのだ。

課長の好意的な対応に私は感謝した。善良な印象を受けた。この人がどうして「犬猫看板」を固執するのか、不思議に思われたほどだった。私は「犬猫看板」については口には出さなかった。ところが、私が登山口開設についての説明を済ませたその帰り際に、向こうから切り出してきたのだ。私が「犬猫看板」についてまったく触れなかったのが怪訝に思っていたようだ。私はいくつかの引き出しを持っていて、「犬猫看板」もその中の一つの引き出しなので、機会があれば改めて話したい、との旨を伝えた。

それでも相手は、私の胸のうちを察しているようで、状況を見ながら望ましい形に持っていきたいと話した。「犬猫看板」を批判的に捉えている私に、何がなんでも牙を剥く人がいて圧力をかけているらしいことも理解した。自分の考えなりビジョンなりを鮮明に打ち出すことなどできずに右顧左眄する相手の立場もわからないわけではない。前任の上司の意を継承し、苦慮しているのだろうと私には思われた。



一刀彫：五味靖嘉作